

数年前、80歳を超えた私の父が、癌の手術をした時のことです。年齢も年齢なので、手術がうまくいかなかった時のことも考え、心の中ではいざという時の覚悟も決めました。幸い手術は成功し、術後しばらくは点滴で栄養を補給し、口から食事をするのが全くなかったのですが、そんな父がようやく固形物を口から食えることができたときに、次のように言ったのです。

「人間は生きるために食べているのか、食べるために生きているのか、わからなくなっちゃったよ。」  
病氣と手術を乗り越え、生き長らえた父が、口から食べられることが生きていくことと同じくらい有り難いこと、幸せなこと、嬉しいことなんだと言いたかったんだと思います。

これを聞いて私は、次の言葉と似ているなと思ったんです。英語です。

“Learn to live, and live to learn.”

「生きるために学べ、そして学ぶために生きよ」です。

この言葉は同志社大学の初代学長、D・W・ラーネッドが語り、愛した言葉です。以前勤務した学校の修学旅行で同志社大学を訪問したとき、図書館の外壁にこの言葉が彫り込まれているのを見て感動したのです。生きていくには学ばなければならない、そして、学ぶためには、まずは生きていなければならないという、学ぶことが生きることと同レベルで大切なのだということがこの短い文章に凝縮されているんですね。

翻って今、与論高校生の皆さんは「学んで」いますか？ 進路指導部の石山先生から、大型連休前半が終わった4月30日の職員朝礼で、「連休中の課題一覧を未だに見ていない生徒がかなりいるので、各教科でしっかりと指導してほしい」という旨の連絡がありました。また、スタディサブリの皆さんのレポートの中に、「スタサブを利用するのは、先生方からの課題配信があるときのみ」という回答が圧倒的に多いことを知りました。このことから私は、「ああ、与論高校生は学びの自走（自走とは自ら走るの意味です）、これができていない」と感じたのです。

「先生方は教える立場であり、生徒は教えられる立場である」  
はたしてこの表現は正しいでしょうか？

以前、私が尊敬するある高校の校長先生が全校朝礼でこのように生徒に問いかけたことがあるのです。その校長先生は続けて次のように話されました。

一方が能動的で、もう一方が受動的であるという関係の中で、かつて教育が正しく成り立ったことはおそらくありません。どちらも能動的であって初めて、教育という営みは成り立つと思います。

先生方は教える立場である、これはその通りです。では、君たちは教えられる立場か。そうではないでしょう。君たちは「学ぶ」立場であると言うべきです。

「学ぶ」ということは、問いを発するということです。教えるとはその問いに対して答えに至る手がかかりを示すということです。先生方は、君たちが問いを発しやすいようにいろいろと手立てをします。そ

れを指導というのです。答えを教えることが指導ではありません。

よい問いを発するためには大きく二つの前提が必要です。一つは、自分は未熟な存在であるという認識をしっかりと持つこと。自分は何も知らないのだという事実に思い至ることです。そしてもう一つ必要なことは、純粋な好奇心です。「なぜ？」と思う心、その「なぜ？」を明らかにしたいという知的好奇心が必要です。

このように校長先生が話されて、私はいたく感動し納得しました。ものを知らない上に学ぼうとしない人は、そもそも「なぜ？」という問いを発したり、「もっと知りたい！」という知的好奇心を持つことなどできません。また、そのような学ばない人たち同士で、いくら議論をしても、いくら協働学習をしても、いくらワールドカフェをしても、たいした成果が上がらないのは、火を見るよりも明らかでしょう。自分が将来、どのような領域で活躍しているのかはまだわからない人が多くかもしれません。でも、だからこそ先生方から提供される課題などは、すべて丸ごと消化し尽くして、その上で自分の志望する進路の領域の学習をさらに深掘りするくらいの意欲や熱量は、これから予測が困難な時代を生きる皆さんには絶対に必要だと思うのです。その上で何か学習で行き詰まったこと、分からないこと等があったり、「なぜ？」という疑問点が生じたときには、遠慮なく先生方に質問してください。何なら、私に直接相談してもらっても構いません。できる限りのサポートをします。

私はテレビをあまり見ないのですが、そんな私が見る数少ない番組の中に、「博士ちゃん」という番組があります。芦田愛菜ちゃんとサンドイッチマンが進行する番組ですね。皆さんの中にも見ている人がいるかもしれませんが、私はあの番組が大好きなのです。何がいいかというと、あの番組に出てくる小中学生くらいの子どもたちが、目をキラキラさせて、自分のこだわりや自分の大好きなことについて、その知識を生き活きと披露し、番組が提供してくれるご褒美のような体験を十二分に堪能しながら、「もっと知りたい！もっと深めたい！」という知的好奇心をたぎらせているんです。このような若者らしい純粋な好奇心に触れることが大人としては何よりも嬉しいし、「これからの時代は君たちに任すぞ！」という気持ちにもさせてくれるのです。サンドイッチマンの二人が、博士ちゃんたちに翻弄されながらも、楽しそうに番組を進行しているのはそういう理由もあると思うのです。博士ちゃんたちそれぞれのこだわりや大好きなことは、てんでバラバラで、普通の人に興味を持ったことではないかもしれませんが、だからこそオンリーワンの存在になれるわけで、「こんな子たちが自分のこだわりや大好きなこと、大学での学びをうまくリンクさせれば、総合型入試や推薦入試で難関大学でも簡単に合格するのになあ」などと、進路指導畑で教員をしてきた私は、この番組を見ながらそんな妄想をするのが楽しいわけです。

そういう視点で見れば、皆さんも基礎学力を日常の学習でしっかりと身につけた上で、この与論島で見つけられないこと・できないことを探究のテーマにして深掘りしていけば、全校生徒126通りの「博士ちゃん」になれると思うのです。それを武器に入試にチャレンジしていけば、あっと驚く結果を出せるかもしれません。考えるだけでワクワクしますね。

それが始業式で話した「脳に汗をかく」ということです。授業以外の学習時間がゼロ時間という人は論外ですが、30分とか1時間とかいう人も少なくないようです。下手をすると、そこそこ勉強する小学生よりも学習時間が短いということになります。「脳に汗をかく」前のウォーミングアップ段階で終わっ

てしまっている。恥ずかしい限りです。大学や短大、専門学校がないこの与論島では、我々与論高校が最高学府なのです。島立ちをした後の進路はそれぞれバラバラになると思いますが、自分を育ててくれた与論島が今後どうなってもいいと思っています。島内にいる学生の最年長者として、皆さんが日々「脳に汗をかいて」学ぶことで、小中学生の模範・憧れとなるのですが、本校の存在意義だと思えますし、それを実践した人の中から、何らかの形でこの島の持続的発展に貢献していくことが、地方の少子化・過疎化が進むこの国の課題解決に、真っ向から取り組みことに繋がるのです。つまり、皆さんが「脳に汗をかいて」学ぶことが国レベルの課題解決に繋がっているということなのです。自分の足で「学び」の第一歩を踏み出してください。

“ Learn to live, and live to learn.”

「生きるために学べ、そして学ぶために生きよ」

本校在学中、この言葉を忘れずに皆さんが高校生活を送ることを期待しています。以上で本日の講話を終わります。